スクールバトラー

時田一哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スクールバトラー

【Ｎコード】
Ｎ７５４８Ｆ

【作者名】
時田一哉

【あらすじ】
今日から俺こと柊恭介は高校二年だ。新学期早々に久々津綾羽と言う、超威張ってるお嬢様の執事になれと言われれて、執事をやっているうちに他の執事や新しい執事に会っていって――・・・お知らせ：８／２１・・・スクバトは今現在ゲーム作成してます。ゲームは３話から選択技が出てきます。その選択技で原作と違う話になっていくかも！？『みなみゆ★Ｇａｍｅ作成♪ＢＬＯＧ』ゲーム作成ブログ～ｈｔｔｐ：／／ｙａｐｌｏｇ．ｊｐ／ｍｉｎａｍｉｙｕ／『スクールバトラー』公式サイト～ｈｔｔｐ：／／ｓｕｋｕｂａ

to.koiwazurai.com/

第01話　：　久々津　綾羽

「行ってきます」
俺は家を出た。
今日は新学期。つまり俺は1年から1つ上がって2年だ。
高校2年はちょうどいい年かな？と俺は思う。
今年はどんな奴が同じクラスになるのか。あいつだけは同じクラスになりたくない。『久々津綾羽（くぐつあやは）』。

人生でこんなに最悪だったことはない。『久々津綾羽』と同じクラスとは…
久々津は噂によると自分の気に入った人をどんどん自分のメイドか執事にして1年終わるまで扱き使うとか。
下僕になった奴は、たとえば日直かわってやったり、掃除当番代わったり、休日に呼び出して家のことやらせたり、とにかくいろいろやらされるそうだ。
どうやらは久々津はお金持ちだそうで…
だから偉そうに振舞っているらしい…まったくこんな迷惑な話はないぞ、おい。
まぁ、とにかくそんなものになったら、俺の1年台無しだ。
がら…俺は物静かにドアを開けた。
すると早速みつけた。教室の真ん中ら辺で、久々津がムスッとしてきょろきょろしている。
おっと何をきょろきょろしてるんだよ。
「む…」

「うっわ…目を合わせるなよ…目を合わせるなよ…目を合わせたら1年間あいつの扱き使われる」
うっわ…俺運悪…目が合っちまった…

「うわぁ…可哀そうに…」
ち…
何を俺と目が合った瞬間満面な笑みを浮かべてやがるんだよ。
久々津がこっちに向かって歩いてくる。
嫌な予感…最悪な1年の予感…
久々津は俺のネクタイを引っ張った。
「あんた、私の執事になりなさいっ！」
来たぁっ～！！

第1犠牲者、柊恭介（ひいらぎきょうすけ）（俺）。

最悪な1年の始まりだ。

第０２話　：　真白　静江

「はぁ…あのなぁ…なぜ俺がお前の執事にならんといかんのだ」
「私がそう決めたからよ」
めちゃくちゃだこいつ。

「うわぁ…あいつ勇気があるなぁ…久々津に口答えなんて…」
「だなぁ…」

「…まったく…つうか俺は絶対そんなもんにならないからな」
「何言ってんのよ…ごちゃごちゃうるさい執事ね」
もはや無駄か？俺が警戒心を持たずに教室に入った罰か…？
「そうと決まれば、ふ…」
「な、なんだよ」
「本当にうるさいわね。退学したい？したいんだ？ふぅん…」
げ…なんでそうなる。
「したいんならどうぞご勝手に」
「…なんでそうなるんだよ」
意味わかんねぇよこいつ。
「じゃあ、あきらめて私の執事になりなさい」
「う…」
それもそれでやだな…
「どっちにする？退学になるか、私の執事になるか。それとも何？メイド？
あなたが選びなさい」
う…
しょうがない…いやだけど…
なるよりは益しだ…
「執事になります…」

「よし、結構結構。あんた名前は何よ」
「柊恭介…」
「よし、恭介…ね…ださ…
ただでさえあんたは眼鏡だって似合ってないのに」
ダサくて結構。
その代わり、俺意外でもいいから、世界中の恭介さんに謝れ。
「何が介よ。恭でいいわ。あんたは今日から恭ね」
勝手に命名するな。
「あ、ダジャレじゃないわよ」
…寒…
「キョウ…の方がいいかしら…ま、どうでもいいことは放っておいて」
久々津がまた周りを見渡している。
まだ下僕作るつもりかよ…
「…いい加減放せよ」
「……逃げない…？」
「逃げない」
「よし、もし嘘ついたら、退学よりもっと酷いことになるからよろしくね？」
げげぇ…
「さて…」
久々津がある一人の人に目を止めた。
その人物とは…

クラスの輪に入っていない。つまり誰とも話していない。
人形かなんかのものに見える。
誰かが近くを通ったら、真っ直ぐすぎる髪は艶やかに靡く。
顔も整っていて綺麗だ。
だけど、無表情である。
せっかく可愛いって言うのに笑わないとはもったいない。

ま、これは俺個人の思いだ。
「あんた名前は？」
「…」
その人物はゆっくり久々津を見た。
「…静江です…」
声も綺麗なソプラノ。
「名字は？」
「…真白…真白静江です…」
「へぇ…ふぅ～ん。あんた名前も外見も可愛いわね」
ここに変態発見せり…
「…そうですか…」
まさかこの可愛い真白さんを…メイドにするのか…？
「あんた下僕になる気ない…？」
「…」
真白さんは久々津から目線をずらして俺の方を見た。
とてもキラキラした綺麗な目。純粋そうな子だ。
可愛い…じゃなくて…なんでそんな目で俺を見るんだろう…
何か俺に問いかけているみたいだ…
「…」
なんとなくわかったような気がする…
『あなたもいるのですよね？』
俺はそう問いかけてきてるみたいに見えた。
『あぁ…いる』
そう目で言ってやった。
すると、真白さんは久々津に目を戻して頷いた。
「よし、決定ね」

マジかい。
すると真白さんがゆっくり席を立ったかと思うと、俺の手を握った。
それと同時にすみれの香りが…じゃなくて…
背ちっさ…そこがまた可愛い…
最後に本音が出る俺…はぁ…ダサい俺とは違う…
「よろしく…お願いします…」
でも、やっぱり無表情だった。
笑顔があればなぁ…

っとちょうど…
がらがら…
先生が来たみたいだ。
「よし、そうと決まれば…来なさい」
久々津は俺と真白さんの手を乱暴に握って走り出した。
俺はいいが真白さんの手を乱暴にするとはっ
「ちょ、君たち、ホームルームが…」
「…残念です先生…さようなら…この学校から居なくなってもお元気で…」
「いってらっしゃい…」
なんてゆうことだ先生までそんな…
まぁ、しょうがない…この学校は久々津グループがお金を出してやって行けるんだから…
「何処に行くんだよ」
「美容室よ。決まってるじゃない」
美容室!?
「あんた髪ボサボサなんだもん。仕方がないじゃない」
そんな勝手に…
「私の執事がダサいなんていやだもん」
だったら俺じゃなきゃいいだろが…

第０３話　：　俺の大変身！？

「キョウ、あんた眼鏡ないとそんなに見えないの？」
「当たり前だ」
「コンタ…」
「やだね」
「む…まだ最後まで言ってないのに即答しないで。
あんたって面倒くさく生まれてきたのね…」
めんどくさくて結構…
「ちょっとあんた。こいつの髪を切ってちょうだい」
「は、はい。わかりました」
「ちゃんと頼むわよ」
３０分後。
俺の髪はだいぶん切られている。
と思う…
ん？なぜと思うといったと思う？
切る寸前久々津に目潰しされていまだに見えてないからわからんのだ。
なんで目潰しするんだよコン畜生っ…
「一応出来ました…」
「ふん。いいんじゃない」
「いいです…」
ん？真白さん居たのか…
うぅ…やっと目が見えてきたような…
「はい、眼鏡…」
美容師の人から眼鏡を取ろうとした瞬間。
久々津に取られた。
「駄目。こんな眼鏡！」
「何がだよ」

「ダサいっ！」
だ…ダサい…また言われた…
「もう、あんた。そのまま見たらぼやけて見えないんでしょ？
コンタクトいやなんでしょ？
だったらダサい眼鏡を変えるしかないでしょうが！
いまどき黒ぶち眼鏡って…はぁ…センスないわ…」
「う…」
毒舌吐くなぁ…こいつは…
そして、今度は眼鏡屋に行った。
「今はコンタクトいやでも絶対付けさせるからね…」
「げ…」
「あんた今視力いくつ？」
「わからん…」
「相変わらず面倒くさいわね…こいつの視力測ってくれる？」
「は、はい」
視力は０．０２だった。
「ふぅ～ん…キョウ、あんたこれ掛けてみて」
「ん？あぁ」
言ったとおり掛けた。
「…微妙ねぇ…次これ」
「はぁ？」
「むむむ…ダサい…次」
「はぁ…」
「ダサいっ！あぁ～もう！」
『あぁ～もう！』は俺の台詞だよ…ったく…
「これは…どう…？」
俺はめんどくさいと思いながらも掛けた。
「…」
「なんだよ」
「い…いいんじゃないかしらこれ…」

「いいです…」
久々津と真白が顔が赤い。
かも。
…いやいや、気のせいだろ。
真白さっきと同じ無表情だし…？
「そうか…？」
俺は鏡を見た。
「…普通だな…」
「何を言ってんのよ…あんたバカ…？」
ゲシッ！！
久々津が俺を蹴った。
「蹴るな。俺は糞真面目だ」
「…」
真白は無表情で俺を見ていた。
ん？あれ…無表情ではないかもな…
「何だ…？」
「い…いぇ…」
「これ、よろしくね」
「は、はいっ！！」

「次は…顔洗いなさい」
「は？」
「だいぶ汗かいたでしょ」
「…あぁ…」
で、先から周りがざわめいているのは気のせいか…？

「あの男の子かっこいい…」
「モデル…？」
「学生…だよね…？制服着てるし…でも…大人っぽいよね…」
「眼鏡が良く似合うわ」

「…？かっこいい？誰のことだ…？」
この時間周りに学生なんて真白と久々津と俺しか居ないが…
かっこいい奴なんていないぞ…
「こほん…あんたよ」
「…？俺？」
「そうです…かっこいいです…」
「……」
俺がかっこいい…？
そんなこと…嘘だ…だって俺…かっこいいなんて一度も言われたことないのに…
「さ、顔洗ってさっぱりして来なさい。今のあんたどうかしてるわ」
「あ…あぁ」

「遅いわよ。キョウ」
「…あぁ」
「むむ…今考えてみれば…キョウ、一週間後の学校のコンテスト出ない？ほら、静江もさ」
「え…」
「はぁ？」
「出なさい。命令よ。ってことで、眼鏡戻せ」
「？」
「黒ぶちによ」
「あ？あぁ」
俺は黒ぶち眼鏡に戻した。
「うわ…こう…いっきに変わるものかね…」
「そんなに違うか…？」
「違うに決まってるじゃない」
なぜ怒る！？

ホワイ？なぜ？
女はわからん…
「はぁ…」
「一週間それでいいわ。かっこ悪くてもダサくても私、目を瞑ってあげるわ」
「は、はぁ…」
「それから～♪静江ちょっとこっち来て」
「…？」
「いい？・・・・・・ってことでよろしくね」
「…私が…？」
「そうよ、私はやらないわ。死んでもこいつとやるなんていや」
死んだら出来ないだろ…？そのなんかをやるんて…
「静江」
何をむすっとしながら話してる？久々津さんよぉ…
「…わかりました…」
真白さんは目でまた問いかけてきた。

『手を握ってもいいですか…？』

！？なぜだ。まさか…久々津いや…綾羽だ。綾羽が命令したんだ。

『…正直…ちょっと…』

『そうですか…私のことが嫌いなんですね…』

『なっ！？そんなことないって』

「な～に見詰め合ってんのよダサキョウ」
ダサキョウ！？
「別に…」

真白さんは俺の手を軽く握ってきた。
「！？」
吃驚した…
「何を遠慮してんのよ静江！もっとくっつきなさい！」
おいおい久々津、なんでそんな怒る！？
「…」
「ま、真白さんもこんな俺とじゃ、いやなんだよきっと」
「…」
真白は首を小さく横に振った。
あ、そこ否定しないんだ…
「静江は恥ずかしいだけよ！」
「…」
「…綾羽が言うな」
「！？私を呼び捨てするな！」
「いいじゃねぇか。綾羽」
「…むぅ…仕方ないわね…いつか綾羽様って言わせてやる」
「は、やれるもんならやってみろ」
「む…」
「お前顔は可愛いのに性格悪いよな」
「なっ！？」
綾羽が顔を真っ赤にしながら怒っている。
トマトみたいだ。
「もうちょっと可愛く出来…」
ピト…
真白さんが俺にくっついてきた。
「ま、真白…？」
「…く～…」
「寝てる…」
「あんたさっきまで静江のこと真白さんって呼んでなかった？」
「あ？あぁ…そうだったな」

「あ、あんたのさ…こうゆうのを頼みたいんだけど…」

第０４話　：　幼馴染

「あ…綾羽様…」
「何よ」
綾羽…テメェこいつ…いつかぶっ殺す…
ちなみになんで俺が敬語を使っているかと言うと、
『その買ってあげた眼鏡とコンタクトのときは敬語ね。
そのだらけたネクタイとブレザーをきっちりすること。
いいわね？そうしなかったらあんたを、あの学校を退学させて家に借金背負わせるから。
いいわね？キョウ』

だそうだ。
なんなんだよまったく。
理由になってねぇし…
「何よじゃありませんから。もっと可愛く歩けないんですか？お嬢様なんですよね？」
「うるさいわね！！余計なお世話よ！」
ゲシ！
綾羽が足で蹴ってきた。
さすがにブチっと来た。
「あぁ、そうですか。はいはい。勝手にしてください。綾羽様っと」
ゲシ！
「言葉使い」
「はい…」
「あれ？恭介でしょ？」
「…」
この声は…
俺はその声主を見た。

あ…やっぱりだ…つぐみ。
つぐみは俺の幼馴染で…わかるのも無理ない。
「髪切ったんだ…？眼鏡も変わってるし…」
「あら、知り合い？」
ゲシ。
い…いってぇ…
「いぇ、誰かと間違えていると思いますが」
俺は爽やかに笑った。
「…」
つぐみは俺を睨んだ。
や、やばい…ばれるっ…
「行くわよ」
「はい」
そう言ってつぐみの横を通り過ぎた。
「キョウ…さっきの誰よ」
「幼馴染です」
「そう…あんたにもいるんだ…」
居ちゃ悪いか。くそ…
「予想外ね…」
「予想外ですか」

「…恭介じゃないよね…敬語使ってるし…
でも…通り過ぎるとき恭介の使ってるシャンプーの香りがした…
怪しいな…あの人…」

第０４話　：　幼馴染（後書き）

ああ…
短すぎたわ…
この小説の更新を待っていた人はすみませんでいした。
最近全然思いつかなくてですね…
ははは
そだ、ブログ訪問してくれた人はありがとうございます！！
ゲームもだいぶ進んできまして、なんともう2話目を公開して、3話目を作っているところです。
あ、ブログのＵＲＬですね。
ｈｔｔｐ：／／ｙａｐｌｏｇ．ｊｐ／ｍｉｎａｍｉｙｕ／
まだ行ってない人は親友美優と南のちょっとおバカ（？）なブログをみてください。
これからもよろしくどうぞお願いします＾＾

第０５話　：　コンテスト前

一週間後。
この学校のコンテストだ。
…執事服ってさ…なんでだよ。
この服めっちゃ暑いんだけど…
「…真白…？」
「…」
「真白大丈夫か…？久々津に無理矢理笑顔を作らされてたが…」
「大丈夫です…」
無表情だ。
「しっかし…名前を聞かれたら久々津綾羽様の執事です、なんて…馬鹿げてる…」
「…トイレ行ってきます…先に行っててください…」
「あぁ」
ちなみに今周りに誰も居ない。
が、誰か来た。
！？つぐみだ。
ぜ…絶対ばれるっ！
１週間前だってばれるかと思ったのに…
つかばれたか？
いや…でも…何も聞かれなかったし…
…あ…空き缶…？なぜに空き缶…
あのまま進んでいったら転ぶぞあいつ。

あ…れ…あの執事服着てる人って…この前の…

危ないっ！
俺はつぐみを受け止めようと前へ出た。
あ…遅かった…
と思った瞬間受け取れた。
ポス…
「ひゃっ！」
間一髪…
「大丈夫ですか…？」
「あ、い…いえいえいえいえ。大丈夫です」

ドキドキ…
…やっぱり見間違えだよね…恭介じゃない…
でも…やっぱり…恭介と同じシャンプーの香り…
ぐ…偶然だよね…？

「あ…有希さん」
ちなみに真白の有希ってのは綾羽が考えたんだが…

『真白、まっしろと言えば雪！！有希だわ！！！』

ふ…鼻で笑ってやりたった。
「…キョウくん早く行きましょう…」
にこ。
笑った…可愛い…
「あ…あの…」
「はい。なんでしょうか」

敬語疲れる…
「…あなたは…」
「俺は久々津綾羽様の執事です」
俺、綾羽に様付けちまった様っ！
「同じく私は久々津綾羽様のメイドです…」
「は…はぁ…」

「ば…ばれるかと思った…あの様子じゃばれてないみたいだ」
「…幼馴染さんですか…？」
もう無表情だ。もったいねぇ…
「まぁ…」
「…そうですか…」
きゅ。
真白さんが俺の腕に抱きついた。
「…？」
「…緊張してます…」
「…俺は普通だな…つぐみにばれなければだけど…」
「…私…親いないのです…兄弟もいないのです…」
「え…？」
「私が小さい頃旅行で事故にあったみたいで…
なぜか私だけ助かったっていう話です…」
マジかよ…
「…小学一年まで近所の家に住ませてもらってましたけど…
これ以上迷惑かけられないと思って出てしまって…
私…本当の笑い方…わからないのです…」
…
「…学校でもみんなが、面白い面白い言っているものだって、笑えないのですよ…」
「そうだったのか…」
「…この話をしたのは…あなたが初めてです…」

「なんで俺に…？」
「……わかりません…」
「…今度の日曜日付き合ってくれるか？」
「え…？ぁ…はい…」
「よし、約束な…」

第０５話　：　コンテスト前（後書き）

あはは…
話がくさいｗｗｗｗｗ
くさすぎるｗｗｗ
きもいｗｗｗ
いやｗｗｗｗ

すいません話が、きもくて、くさくて…
えっと…次話も見てください＾＾

第０６話　：　コンテストでありえない事件

さて、今日はコンテストの日だが、なんか物凄くめんどくさい。なんで俺が出ないといけないんだよ…生徒会の仕事で役員をまとめないといけないのに…はぁ…これは西崎に任せるしかないか…

西崎は、生徒会書記の一年女子で、生徒会役員の中で一番真面目に仕事をしている。

後の俺を含む生徒会長、副会長二人、会計一人は滅多に生徒会室に行かない。つまり西崎が放課後部活に遅れてまで、一人で雑務をやっているわけだ。まぁ、俺は綾羽に会う前まで毎日に行ってたわけだが…今では全然通えていない。

「会長ここに居たんですね」

そんな声が後ろから聞こえた。

ちなみに会長とは俺のことだ。

振り返ると顔をつんっとしているポニーテールの女子がいた。西崎だ。

「最近なんで生徒会なんでに寄らないんですか？会長。いい加減仕事をしに来てください。殺しますよ？それと副会長たちに会長からも言ってください。まだあの人たち生徒会室に三回ぐらいしか、顔を出てきて居ないんです」

「あいつらは放っておけばいいだろ。それと俺は最近忙しい」

「なんでですか？」

「いや…話すと少しばかり長くなりそうだ」

「そうですか。では今から会長に仕事をきっちりしてもらいますからね？」

…ヤバイ、途中で抜けられるか？

それから俺はコンテストのあいさつなどをして、俺の出番が近づいてきていた。

「に、西崎」

「なんですか？」
「俺はしばらく抜ける。だから後はお前に任せる」
そう言って俺はその場を去った。
「あ、ちょっと会長っ！？」
それから時は流れ――
「優勝は久々津綾羽さんの執事&メイドさんです」
…いやぁ…人に注目されるってやだ…
「ひとことどうぞ」
ひとこと…？聞いてねぇぞ…
「本当にありがとうございます。綾羽様も喜んでいる思います」
何が喜んでいると思います、だ。うぇ…きしょい…
「メイドさんもどうぞ…？」
「え…」
真白さんはあまりの恥ずかしさだろうか、俺の後ろに隠れてしまった。
おいおい…真白～…俺も恥ずかしいんだぞ…？
「あ～え～っと…？」
なんで俺にマイクを向けるんだよっ！
真…真白っ…
すると…真白から何か伝わってきた。『柊くん…私…人前駄目なのです…
助けてください…』

え～…どうすれば…
って言うか真白から出る電波は何？
「あの、司会者さん。このあと用事があるので、もう終わりで宜しいでしょうか？」
「あ、はい。ではこれでコンテストを終わりたいと思いま…」
バリン！
窓が割れた。

「！？」
すると、舞台の横から
「キョ、キョウっ！！敵よ！」　はっ！？何で俺に言うんだよ！
「は、早く助けて！」
「そ…」
そんなこと言われてもな…
「キョウ！！」
すると黒いスーツを着た男たちが来た。
な！なんで俺に向かってくんだよ！！
「奴らは私の…持っているものを狙ってるの…！助けて」　そんなこと言われても…
「なんだ…今度の守りはまた学生か
久々津グループのお嬢様の見る目も変わったものだ」
そう言ってあいての奴が俺に向かって拳を向けてきた。早い。
俺は思わず右手を出した。
そしたらその拳を受け止めた。
「んん！？なんだこの小僧！出来るな」
な！勝手に出来ると思わんでくれ！
俺はただの学生だっつうの！
今のはまぐれだ！！
パシ！ペシ！バシ！ベシ！
全部受け止めた。
「くっそ…なんだこいつ」
「キョウあんたすごいじゃない！」
するともう一人の方は銃を出した。
ちょ、誤解だっつうの！！！
バン！
俺はたまたま取った真白さんのお盆ではじき返した。
カキン！
「なんだこいつ。ただもんじゃねぇ！」

「今日は引き返すぞ」
そう言って引き返していった。
なんだったんだよ今のは…
「キョウあんたなにか習ってたの？運動神経良いわね」
「いや…何にもしてない…です」
「本当に？」
「本当…です」
自分でも信じられない…
「…すごかったです…」
「さっきの…怪しい人…誰ですか？」
「だから私の持っているものを狙っている悪い奴よ」
「え～っと…みなさん速やかに教室に戻ってください」
そうしてコンテストは終わった。
なんだったんだよ…
綾羽はなんで狙われてるんだ？

第０７話　：　また奴らがやってきた（前書き）

うざいですねｗ自分で自分の小説を消したいｗｗ

第07話　：　また奴らがやってきた

「あ～疲れた～…」
「…お疲れ様です……えと…日曜日のことなのですが…」
「…ん？」
「キョウ！！！」
「うっわ。なんだよ吃驚した」
「あんた静江と日曜日にどこに行くつもりよ？」
「どこでもいいだろ」
「退学！！」
「お前が退学しろよ」
「偉そうな口たたくな！！」
「うるさい」
「恭介、ちょっといい？」
俺は声がしたドアを向いた。
もちろん相手はつぐみだ。
「なんだ？」
「ちょっと話したいことがあるの」
「…なんだよ」
ばれたか…？

「恭介って今日のコンテスト出てたでしょ？」
「何言ってんだよ」
ばれた！！
「私に嘘つかないでくれる？」
「…本当に俺じゃねぇって」
「…嘘。嘘よ。嘘！！なんで！？恭介今まで一度も、私に嘘ついたことなかったじゃん！！」

「ちょ、落ち着けって」
「空き缶を踏んじゃって、転びそうになったのを助けてくれたよね？」
「何を言って…」
「…私嘘をつく恭介嫌い…嫌。大嫌い！！！
でも大嫌いになりたくないから正直に言って！！」
「……」
なんかつぐみに悪いことしたな…

「キョウ、どこ行っ…」

「…私…恭介のこと昔から好きなのよ…？だから一緒の高校を受けたのよ…鈍感…」
「…俺は――だ…」
「…うん…」

「っ……！！
…なん…で…心が痛いの…？
どうして…悲しいの…？
どうして…キョウが他の子と話しているがもやもやするの…？
…ぁ…そうか…私…キョウのことが…好きなの…？
あんな庶民のことが…
でも…もう…キョウとあの子は…」

「……」
「……」

「ちょ、ちょぉ～っとぉ！！！さ、探したわよっ！！！」
うわ…来やがった…これじゃあ…今年は勉強がまともにできねぇ…
…恭介…
口出し無用だからな…
なんでよ。
退学させられるぞ。
え…
「に、日直変わりなさい！」
「は？そんなのまっぴらごめんだ。だいたいなんでお前なんかに一年付き合わないと行かないんだよ」
「わ…」
「私が決めたから、とか無しだからな」
「な、何よぉ～。いいじゃない別に」
「よくねぇんだよ」
「あのねぇ…」
「退学させるって話も止めろよ。とにかく俺はもうお前とは構わないから。行くぞつぐみ」
「ぇ…うん…」
「ちょ…」

「おっと…ここに居たか。探したぞ」
「っ！？ま…て…ぇ…」
…何かがおかしい…あれだけうるさい綾羽が静かになるなんて。
俺は後ろを向いた。
黒スーツを着た男が二人居て、一人は綾羽の首を絞めていた。
「さぁ、あれをどこにやった」
「あんた…らなんか…に教えるわけが…ない…じゃない…」
嘘くせぇ…
「ちょ、恭介…」
「なんで俺に言うんだ…先生呼んで来いよ」
「う…うん…」
そう言ってつぐみは去っていった。
「おい…さっさと教えろ」
「おいおい…なんであの威張ってばかりのお嬢様があっさり捕まってるんだよ」
「む…う、うるさいっ！！！」
「そう来なくちゃな…そこの黒いお二人さんこっち来れば？」
「は？」
「俺が相手してやる」
そうして俺の方に黒いスーツの二人が向かってきた。
意外とバカ…
っと、思ったが。いきなり向けてきた拳は早かった。
俺は思わず右手を出した。
俺は反射的にその拳を受け止めた。
「ふぅん…こいつ出来る…」
おいおい…ちょっと挑発しただけだろが…なぜこうゆうことに…
勝手に出来ると思わんでほしいもんだ。
俺はただの学生だっつうの。
今のはまぐれだ。
パシ！ペシ！バシ！ベシ！

全部受け止めた。
「くっそ…なんだこいつ」
「今日は引き返すぞ」
おっと逃げられる。
とりあえず…足元に一蹴り。
相手は呆気なくずっこけた。
「おぉ…弱…こんな悪党いるのか…？」
俺はそう言いながら下がった眼鏡を上に上げた。
ちょうどつぐみと先生一人が来た。
「恭介…？」
「ん？なんだ」
「その人たちどうしたちゃったの…？」
「俺が一蹴りしたらずっこけて立てなくなってるだけだ」
「柊くん。き、君大丈夫か？」
ん…？なんだ白石先生か。
「大丈夫ですから先生」
「っとそうだった…新学期そうそう悪いのだが転校生が君のクラスに入るのだ。生徒会長としてちょっと話して見てはくれんか？私じゃ相手してくれんのだよ」
「え？まぁ…話してみますよ…？」
ちなみに何で俺が生徒会長かと言うと…この学校で生徒会長になりたがってる奴が居なかったため、もっとも成績優秀…（？）な俺に決まったわけであって…
「よかった。校長室に居るから真白くんと一緒に相手してくれ」
…今真白って言ってなかったか？気のせいか…
「はい。っとじゃあつぐみ俺用事出来たから」
「うん。頑張って恭介」
「あぁ」
俺は校長室に向かおうとした瞬間腕を捉まれた。
「恭介あんたまさか生徒会長なわけ？」

なんだ…綾羽か…
「…は？何を今更…」
「とてもそうには見えないわ…」
「はいはい。悪かったな、俺が生徒会長で。じゃ」
「む…ム～カ～つ～くぅ～…」
それは俺の台詞だっての。

第07話　：　また奴らがやってきた（後書き）

ははは、うぜぇｗｗ
まぁ…話がだんだん糞になってますが…この先どうなるんでしょうね？自分にもわかりませんよはっきり言って正直ｗｗまぁ…うん…もうこの先見てくれる人居なさそう…でも心優しい人は見てくれええ！お願いだあああああ！！

あぁうざい作者ですいません。
これからもよろしくお願いします。

第０８話　：　第２の綾羽（俺命名）

こんこん。がちゃ。
「失礼します」
すると、客椅子にツインテールの女の子が座っていた。
「柊恭介だ」
「ふ～ん…そう」
こっち向けよこの野朗。
「お前名前は？」
「なんであんたに名乗らな、佐藤美香（さとうみか）よ＾」
…なんで今俺の顔見た瞬間名前を名乗ったんだこいつ…
それに『よ～』？
「草間様（そうま）ぁあ」
そう言って佐藤と言う奴は俺にダイブしてきた。
当然俺は避けた。
「は？」
それでも佐藤は俺の脚にしがみついている。
草間？誰だそうりゃ？
「誰だよ草間って」
「何言ってるのよ草間様～あなたのことじゃない」
アホだこいつ。
「だからそいつはどんな奴なんだよ」
「はっ！！」
俺のその言葉で我に返った
「…コホン…いきなりの無礼失礼したわ」
佐藤はそう言って俺の脚を放してスカートを整えた。
「……ウェブカレ…の…草間薫様よ…」
「…は？ウェブカレ？お前のウェブ上での彼氏か？」
「そうよ。まぁ…私のだけじゃないけど…あんたが…その…草間様

に似ているのよ」
「…は？意味分からん…」
「…簡単に（？）言うと～…あんたのことが好きなの」
「…はい？」
こいつ真顔で言いやがった。
つぐみとは大違いだ。
「っ……」
がちゃ。バタン。
「・・・？」
真白…？
がちゃ。
「真白」
「……」
「どうした？」
「…クラクラしたので、少し外の空気を吸いたかっただけですよ…」
「そうか。……日曜日の約束忘れるなよ」
「…はい…」

第０８話　：　第２の綾羽（俺命名）（後書き）

あぁ…

わ～

この話はスルーしよう。

第09話　：　日曜の真白とのデート（？）

コンテストから5日経って、真白との約束の日曜日になった。
待ち合わせはなんとなく学校。
8時に待ち合わせている。
なのに俺は1時間遅れた。
「やっば…真白に待たせちまった」
俺は急いで校門前に行った。
真白は校門前に立っていた。
真白の私服姿は可愛かった。
でもなぜか今日はちょっと違った。あの、下の方がウェーブのかかった髪がまっすぐになってたからだ。
「真白ごめん遅れて」
「…大丈夫ですよ」
「あのさ…なんで髪まっすぐストレートに…」
「……気分転換ですよ…」
なぜか真白は無表情のまま顔を少し赤くした。
「…あ…あぁ…どのくらい待っていたんだ？」
「…軽く3時間ぐらいですよ…」
真白は顔を赤めたままそう言った。
「は？3時間？」
「…はい…」
「しかも軽く？大丈夫なのか？俺が遅れたから1時間多く居たし…」
「…本当に大丈夫ですから…」
あぁ…赤かった顔が戻った。
「じゃあ行くか」
「…はい…」

「真白はどうゆうところ行きたい？」
「…ぇ…」
「ぇって…じゃあマックでも行くか」
「…マックってなんですか…？」
「は…？マック知らんのか？」
「…はい…」
「本当に…知らんのか？」
「…はい…」
「へぇ…」

「ん、ポテトとハンバーガー」
「……」
また真白は顔を赤くしている。
最近真白といつも居るようになってから表情がわかるようになってきた。
「真白？」
「いぇ…初めてみたものですから…」
「そうか」
「はい…」
そして15分後。俺は食べ終えた。
真白はと言うと…じっと無表情で俺を見ていて全然食べていなかった。
「…真白食べないのか…？」
「…はい…持って帰ります…」
「大丈夫か？食べないで」
「…大丈夫ですよ…」
俺は唯でさえ細くて小柄な真白は全然食べなくて、心配になってポテトをつまんで食べさせた。
「っ…！？」

「うまいだろ？」
「……はい…」
気のせいか…？ちょっと真白が困ってるような…赤いような…？
どうしてだ？
「……気持ち悪いのか？」
「……」
俺のその言葉を言った瞬間無表情に戻った。
「……まぁ…気持ち悪くないならい…」
いんだがって言おうとした瞬間、バシィいい！！！
背中に激痛が走った。
「ぬ…何すんじゃボケぇえぇって、あ？綾羽！？」
「あんた…いっぺん死んで来い！！！！！何のん気に静江と…でででででデートしてんのよ！！！！ほ、本当にしているかどうか見回ってみた結果これか！！！し、静江にあああああっ！！！」
「何言ってんだよ…最後のあああああって…」
「アホぉお！！帰るわよ！！」
「あんま大声出すなよ」
「いいのよ。ここは私の家の会社が作った場所でもあるんだから」
「は…？」
…マックグッ
マック、クグッ
あ…マック久々津？
「くだらねぇ」
「何よいきなり…それより帰るわよ」
「ちょ、待てよ」
「何よ」
「これは真白の笑顔のためだ」
「静江の笑顔のため…？」
「そうだ」
「しょ、しょうがないわねぇ…」

なんでそこで赤くなる？
「私も協力するわ」
綾羽が満面の笑みで言った。
「は？なんで？」
「いいから」

「…ここなんですか…？」
「は？あ～ゲームセンター」
「ちょっと、何よゲームセンターってなんか聞いたことある…」
「お前も知らんのか。しょうがないなぁ…」
「ちょ、キョウ！！何この可愛いぬいぐるみ！！」
「クレーンゲームだ」
「へぇ…って、あ。思い出した」
「何をだ」
「ここも私の家の会社が作ったんだったわ」
ゲームセンタークグツン
「…もう…なんか突っ込みたくない」
「まぁいいわ。キョウ、これとこのふわふわのでっかいクマぬいぐるみ取ってよね」
「は？」
「いいから取りなさい！！私と静江の分よ！！2回で2つ取りなさい！！」
「なんつうむちゃなことを…」
「手っ取り早くネ」
「はいはい…」
まぁ、何だかんだ言って俺は2回で2つ取ったわけだ。
…もう少しで取れないところだったぞ一つ。
「すごいわキョウ！！」
綾羽は満面の笑みで喜んだ。

「…可愛いです…」
真白は今日初めて笑った。少し顔が赤い。
「っ……」
…こう…なんで女子はこんなんで喜んでくれるのかな？めっちゃ照れるんだけど…
２回やって２００円だぞ？
「そうだ」
つぐみにも取ってやろう。
まぁ、見事にまた取れたわけだ。
「キョウそれどうするの？」
「…ちょっと、な」
「…今日は楽しかったです…」
あぁ…真白。その台詞は笑って言ってくれ。
「そうね」
綾羽は先からずっと満面の笑みだな…
今日は真白を笑顔にするための日だったんだが…綾羽を笑顔にしてしまったようだ。
「じゃあまた明日ね」
「…明日です…」
「あぁ」
…静かだな…帰り道は…
「あれ！？恭介！？そのぬいぐるみ２つどうしたの！？」
「あ？あぁ…これは妹に」
「そうなんだ…恭介は優しいね…」
つぐみは笑ってたがちょっと残念そうだ。
「…何、残念がってるんだよ」
「え？」
「妹のは一つだけだぞ」
「えぇ！？自分用！？あ、それともお母さんに！？」
「んなわけないだろ。お前にだよ」

「え…えぇえええ！？」
「お前今ぬいぐるみ集めてなかったか？」
「え？うん！ありがとう恭介」
つぐみは柔らかに笑って、俺から受け取って大事そうに抱きついた。

第０９話　：　日曜の真白とのデート（？）（後書き）

ちょっと長く書きすぎたｗｗ
マックグツとゲームセンタークヅツン無視してくれｗｗ

第１０話　：　弁当交換？

「キョウ！！明日お弁当を作って来なさい！！！命令よ！！」
「は？」
「少しの量でいいから。あ、有希ちゃんもね」
真白のこと有希ちゃんっつったこいつ。
「…はい…わかりました…」

はい、次の日
俺は朝早く起きた。
いつもよりかなり早く起きた。
ってなんで俺がこんなことしないといけないんだよ！！
「はぁ…まずは玉子焼きでも作るか…」
俺は玉子焼きが一番自信があった。
ジューーー…
くるん！
ポスッ
「よし、出来た」
いつも妹に作ってるから当たり前だな。
誰だ今俺のことをシスコンっつったのは？
「あとは…小松菜とマスターソースの和え物…と…」
なんやかんやで、極少な目のご飯だが俺と綾羽と真白の分を極々少なめだが作った。

「キョウと有希ちゃんお弁当作ってきた？」
「はぁ…作ったぞ」
「…作りました…」

「じゃあ出して」
俺と真白は綾羽に弁当を渡した。
「じゃあ、私もね。作ってみたのよ」
「は？」
「何よ」
「いや…意外だなって…」
「む…まぁ…初めてなんだけど、
料理長に教えてもらいながら作ったから、まぁまぁおいしいんじゃない？」
キョウみんなの分作ってきたの！？すごいわね」
「すごくねぇし」
「じゃあ食べるわよ！！！」
そして真白と綾羽の弁当を分けて、俺の弁当は綾羽と真白に渡った。
「えええ！！有希ちゃんのおいしいし、可愛い！！！」
「…そうでしょうか…？」
「真白のこのいろどりすごいな」
「…嬉しいです…」
にこ。
あぁ…あの日曜日以来笑顔になるのが多くなってきた真白。
可愛い…
「む…んん？キョウ…これ…」
「なんだよ」
「…おいしい…なにこの玉子焼き…ふわふわ…有希ちゃんと同じぐらいふわふわ…」
「そうか？ってゆうかお前に作ってきたものカロリー高っ」
「え？そう？」
「高い。お前もうちょっと考」
「恭介あ～ん」
「ん？」

「おいしい？」
「あぁ。ってつぐみ？いつの間に居たんだよ？」
「今」
「そうか…つか、このタコウィンナーうま」
「えへへ」
「む…キョウの馬鹿！！！！！！」
「は？」

第１０話　：　弁当交換？（後書き）

あぁ…恭介が…鈍感！！！！！！！

なんでｗｗｗｗ

ひどｗｗｗｗｗ

こんな…小説を読んでくれる人は、また見てください＊

第１１話　：　喧嘩

「恭介。前ぬいぐるみくれてありがとね。すんごく可愛い。大事にするからっ」
「そうかよかった」
「その…お礼ってことなんだけど…さ…今度映画行かない？奢るからっ」
「は？お礼なんかいらねぇよ。ただの１００円のぬいぐるみだろ？」
「い、いいから映画行こうよ奢るから」
「…わかったよ。ったく…」
つうことで、俺は今度の日曜につぐみと映画を見に行くことになった。
「絶対来ないと駄目だからね？」
「わかったから」

そして、教室に入ったとたん。
「キョウ。今度の日曜うちに来れない？」
綾羽がそんなことを言ってきた。
「は？俺は用事ある。無理だ」
「なんでよ。こっちのほうが優先よ？」
「なんでお前の家に行くのが優先なんだよ」
「そんなの当たり前じゃない。あんたが私の下僕だからよ。だから下僕は速やかに主の言うことを聞くものよ」
「アホか。付き合ってられん」
そして俺は綾羽を避けて椅子に座った。
「む…」
そして1時間目が終わってから、綾羽がまた話かけてきた。
「キョウ。やっぱり日曜来て」

「なんでだよ」
「その日は使用人が皆居ないのよ」
「は？それでなんで俺が行かないといけないんだよ」
「当たり前でしょ。私の下僕じゃない」
「…めんど…」
「ってことで来なさいよね」
「やだね。その日は都合が悪い」
「いいからこっちを優先しなさい」
「無理だ。多分相手は怒ると思う」
「…まさか…デートとか言うんじゃないでしょうね…キョウ？」
なんでそうなる。
「…そんなんじゃねぇけど…」
「そうなんでしょ？本当のことを言いなさいよ」
「ちげぇって言ってるだろ」
「じゃあ何よ」
「ただ、つぐみと映画を見に行くだけだ」
「デートじゃない。こっち優先にしなさい！！」
「駄目だ駄目だ」
「キョウ…なんか…もういい！！！全然わかってないわ！！！！やめて結構よ！！」
「なんだよ。止めれて精々する」
「むっ…何よダサ眼鏡のどアホ！！！！」
そう言って綾羽は教室から出て行った。
「柊…言い過ぎなんじゃないか？もしかして退学させられるかも知れねぇぞ？」
「…いいんだよ別に」
…ちょっと言い過ぎたかもしれん…
それにしても…ダサ眼鏡にどアホ？
……。
ダサ眼鏡なのは承知するが、俺はどアホじゃない。

…なんだよ…つか…もう授業始まるじゃねぇかよ。アホはあいつじゃねぇか。

そして昼休み、つぐみにそのことを話していた。
「ねぇ、恭介。それ…可哀想だよ。今度の日曜は綾羽さんの家に行ってあげて」
「お前との約束はどうすりゃいいんだよ」
「…それは…次の次の日曜で良いから」
「わかった」

教室に戻ると綾羽はぶすっとして弁当を一人で食っていた。
「……」
かなり機嫌が悪そうだ。
これは話し掛けれない。
放課後にしよう。
そして放課後になったが、綾羽は相変わらずむすっとしたままだった。
……。
「……」
…仕方ない…
「綾羽」
「……」
「綾羽」
「……」
「綾羽〜」
「……」

こいつ…無視するつもりか。
「綾羽さん」
「キモい失せろ」
「俺がお前にさん付けしたらキモいか？それより、次の日曜良いことになったんだ」
「え…？ほんと？」
「あぁ。つうことで俺帰るから。じゃ」
俺はさっさと帰りたかったら教室を出て行った。

第１１話　：　喧嘩（後書き）

…思いつかなかった末これですよ？これ…
キョウが酷いよね、どんどん酷くなってるよ…

第１２話　：　なんとっ！？親公認！？

「キョウ遅い！！何分待たせてんのよ！！！」
「何分ってまだ約束の時間来てねぇじゃねぇかよ」
今日は日曜日。
綾羽の家の使用人が休みの日だ。
俺は綾羽に頼まれ、つぐみとの映画を見る約束を次にし、朝の６時しぶしぶ来る破目になった。
俺は綾羽の家に行くのに、学校で待ち合わせした、と言うわけだ。
「バカ！！歩くわよ！」
「は？」
「いいから歩く！」
「あのさ…お前の家どこ？」
「ここから…どのくらい歩くのかしら…まぁいいから付いてきなさい」
それで歩いて２時間。
「おいおい…でかすぎだろ…」
そして遠かった…
「そう？庶民の家が小さすぎるだけでしょ？」
何を言うかこいつっ…にしたってでかすぎだろ…東京ドーム軽く５個分はあるぞ？
「あのねぇ～…まだこれは小さいほうなんだから。別荘はもっと広いから安心しなさい」
これの上あった上っ…怖ぇ…
「自転車はそこの置きなさい」
「はいはい…」
そして綾羽はでっかすぎるドアを開けた。
「これ着て紅茶出しなさいよね」
綾羽は玄関の隅に置いてあった執事服を俺にぶん投げた。

これは…ちょっと懐かしい執事服…って…
「は？わざわざ着るのかよ？」
「当たり前でしょ？バカじゃない？」
「当たり前じゃねぇ」
「はい！すぐ早く！！いいからこの部屋で着替える！！１０秒で着替えて来い！！！」
「無理だ」
テンポ良く早口で言われても困るし…
そして着替えて３分。
「お～そ～いっ！！」
「無茶言うな！この服着にくいんだよ」
「じゃあこっち来なさい。ほら早く！」
綾羽に連れて行かれたのは、３０畳ほどのキッチンだった。
つかもはやキッチンじゃねぇ…厨房だ厨房。
使用人のコック何人いるんだよ？
「ほらこの茶葉使って紅茶作りなさい！」
「は？紅茶？俺作ったことな――」
「うるさい！早く！」
「無茶苦茶だ…」
俺はポットに適当に紅茶用のジャムとお湯を入れて、ティーカップに入れた。
「おらよ」
「乱暴するな！」
「るせぇ」
「まぁ、いいわ。あんたが始めて作ったと言う紅茶…不味かったら唯じゃおかないわよ…」
綾羽は俺をものすごく睨みながら飲んだ。
「っ不味…あぁ～もういい。片付けちゃって」
「はいはい…」
俺はしぶしぶ片付けた。

「…何こいつ…使用人より美味しいじゃない…初めてだって言ったくせに…」
「は？なんか言ったか？」
「な、何も言ってないわよ！！」
…んだよこいつ…言いたいことがあれば大きい声で言えば良いじゃねぇかよ…
「次は昼のごはんなんか作ってよ。冷蔵庫のものなんでも使って良いから」
「は？良いのかよなんでも使って」
「いいのよ。使用人は何でも良いので、自分で作って食べてくださいって言ってたし」
「…そうかよ」
「じゃあ作り終わったら王広間にでも持ってきてよね」
「は？何処だよ？」
「いいから持ってくること！！いいわね？」
「はいはい。わかりましたよお嬢様っと」
「言葉遣い良くしてよね。お父様とお母様もう少しで部屋から出てくると思うから、後２人分追加ね。じゃ」
そう言って綾羽は出て行った。
さて…どうする…すごいでかい冷蔵庫様にはいろいろ食材が入ってるが…
…つか綾羽の父さん母さんがどうなのか全然予想がつかん…
まぁ、そのことはほっといて…とりあえず豪華なもんは作れないがやるしかないか…
俺が作るのに取り掛かってから、１０分後。
なんて言う魚かは知らんがさばいてたところ、物音が後ろからした。
なんか知らんが俺は無意識、反射的に近くにあった包丁を取って振り向いた。
「…えっと…何か美味しい匂いがしたので…誰ですか…？」

誰かに似ている…！綾羽だ！！この人もしかして綾羽の母さん！？
綾羽と違っておしとやかそうで、優しそうな人だった。
「すいません。俺、綾羽さんのクラスメイトで…」
「あら、そうなのですか。去年も使用人がいない時そうゆう子が来て…どうせまた綾羽が無理矢理頼んだのでしょう？」
「いやいや違います」
本当はそうだけど…
「そう？だったら良いのですが…朝ごはんまで作らせるなんて」
「いやいや大丈夫です。慣れてますから」
ってやべ！！慣れてるって言っちまった。
「あらあら…やはり強引に…あなたは優しいのですね。あの子のためにありがとうございます」
「いやいや、大丈夫です」
俺先からいやいやって言ってばかり…
「あの、朝ごはんもうすぐ出来るんで、待っていてください」
「本当にありがとうございます。でわお言葉に甘えて王広間、主人にも言って待っていますね」
…綾羽とちげぇ…
そして俺は後２０分掛けて作り、王広間とやらを探した。
何処だよ？広すぎだろ…そう迷っていると、一人の男の人が向かってきた。
「君が今年の子かね？」
多分綾羽の父さんだろう。
「あ…はい。勝手に入ってすみません」
敬語疲れる…
「いやいや構わんよ」
「は～…」
「それで君は何をしてるんだね？」
「それが…王広間の場所がわからなくて…」
「それだったらここだよ」

綾羽の父さんはすぐ左隣の戸を指差した。
「あ…え？ありがとうございます」
真横かよ！？
がちゃ。
「遅いわよ！」
「綾羽。作ってくれたのですからそうゆう事は言わないのですよ」
「だってぇ…」
「頂きましょう」
…美味くなかったらどうしようか…
「あら、おいしい」
「そうだな」
「それは良かったです」
よかった…金持ちって正直どうゆうのが良いのかわからんかったし。
「…美味すぎる…庶民の味って所ね」
へいへい悪かったですよ庶民の味でよ…
っ…！！なんだこの殺気！！
「来る。床に伏せろ！」
「何がよキョ」
バリン！！！
前のコンテストで見た黒尽くめの男たちだった。
俺は咄嗟に近くにあったナイフとフォークを取った。
「なんだよ前の小僧じゃねぇか」
そう。この前の悪党は隙を見て逃げたんだった。
「そうだが。なんだ？用があるんなら俺が相手する」
「そうか。じゃあそうさせてもらう」
そして拳銃を出してきた。
バン！
大丈夫俺は出来る。
手をかざし、弾を取り、ナイフを投げて相手の肩に刺した。

「うっ…」
さすがにあの黒〇〇のセ〇ス〇〇〇までは行かねぇな。
「早めに帰えっとかねぇと殺すからな？」
「ちっ。今日のところは帰ってやる」
そう言って呆気なく帰っていった。
「はぁ…」
疲れた…遠くからナイフを投げて刺すって肩脱臼しそうになった。
「すごいじゃないですかあなた。何かやっていたのですか？」
綾羽の母さんがそう言ってきた。
「あ、いや。やっていません」
「すごいではないか君！！」
「……」
俺は綾羽の両親に圧倒されてもはや何も言えなかった。
「ありがとうな。えっと…」
「柊です」
「柊くんとやらありがとう」
「ちょっと質問が…」
「なんだね？」
「さっきの人たちって何ですか？前にも学校に来たんですが…」
「ライバル会社の手下だよ」
「ほほぅ…」
なるほどねぇ…
「これで学校では綾羽の心配はあまりしないで済むな。よろしく頼むよ柊くん！」
「よろしくお願いしますね」
…任されちまった…

第１２話　：　なんとっ！？親公認！？（後書き）

長～い長い。
長く書きすぎたね。
あはは。
学校始まっちまったよ…ｏｒｚ．．．
最悪…やだよぉ…めんどくさいよぉ…（泣）

第13話　：　新たな執事登場！

「ここが今日から通う学校ですか…普通でよかったです。さて――」

◇　◇　◇

「え～…またこのクラスに転校生が来る」
「「「マジ！？前来たばっかジャン！？」」」
「はいはい。うるさい声揃えて言わない。入って来い」
ガラガラ。
そいつが入ってきたと同時に驚きの声が響き渡った。
俺の嫌いなタイプ参上だ。
「今日から、この学校に転校してくることになった如月誠（きさらぎまこと）です。どうぞよろしくお願いします」
「「「きゃ～かっこいい！！」」」
と、女子の声。
うぜぇ…俺やっぱこうゆうやつ嫌い。好きになることなんかぜってぇねぇ…
だいたいなんだよ？俺と同じくメガネ掛けてるくせしてかっこいいとは？あ？
そう思っていると、そいつは俺を見て微妙にニヤリと笑ったような感じがした。
…なんだこいつ…なんか…普通じゃねぇ…
「じゃあ開いてる席に」
「はい」

如月という奴は開いている席に座ると思いきや、俺の前に来た。
「あなたが柊さんですか。どうぞよろしくお願いしますね」
なんだこいつ…なんで…俺の名前知ってんだよ？なんで俺に話しかけてくんだよ？
しかも席はもっと後ろなのに…
「では…」
如月はそれだけ言って開いている席に座った。
…なんなんだろうか…何かが起ころうとしている…
そして休み時間。
当たり前ながら、転校生の如月の周りには女子が集っていた。
「ごめんなさい。ちょっと通してください」
そうゆう声が聞こえてきて、如月が再び俺の前に来た。
「どうも〜」
「去れ。そして散れ。その笑顔むかつくんだよ」
「酷いですねぇ」
「で？お前の目的はなんだよ？」
「はい。ちょうど今言おうと思っていたところなんですよ」
「…何をだよ」
「あなたには綾羽さんの執事には向いていないんですよ。あきらめて執事を止めることですね」
……？
「は？」
「ですから、あなたには綾羽さんの執事は向いていないんです」
「そうかよ。お前はなんだ？」
「綾羽さんのお父様から頼まれて来ました。綾羽さんをあなただけにお守りするのは、完全には安全ではないので君に頼む、と。でもですね…」
如月はニヤリと笑って言った。
「僕だけで十分ですよ。あなたが居たら足手まといなだけです」
なんなんだこいつ…

「あ～今思い出した。お前学力テスト日本全国で1位だろ？どんな頭してんだよ？化けもん？」
「化け物ではありませんよ。ただ空欄に答えを入れてるだけです」
「…あ～腹立つ」
あ～ちなみにいつもうるさい綾羽は固まってみている。
「嫌味か？」
「嫌味ではありませんよ。ちなみに話を逸らせないでいただきたいです。さすがの僕でも話しにくいですから」
「俺好きでやってるわけじゃねぇし？勝手にやりゃあいいじゃねぇかよ」
「それじゃ駄目なんですよ。僕の気がすみません」
「はぁ？」
こいつは一体どうしたいというんだ。
「勝負と行きませんか？」
「は？勝負？めんど。なんで俺がそんなことしなきゃいけねぇんだよ？」
「問答無用です」
如月が一瞬にして、シャーペンを俺の肩に刺そうとしたが、俺は咄嗟に教科書を取ってそれに当たるようにした。
…如月…こいつ半端ねぇ…結構動きが早い。
しかも教科書に先のほうが結構食い込んでいる…
「結構余裕ですね？リラックスの体制で咄嗟に教科書を取るとは、なかなか出来ませんよ？」
「そりゃそうだな。普通は出来ん。つか俺はお前の相手しているほど暇じゃない」
「そうですか。それはお邪魔しました」

「…まえ…」
「…？」
如月の後ろから声が聞こえた。

「お前〜…草間さまになってことをしているの…？許せない…」
久しぶりに見たこいつ…
後ろに居て邪悪なオーラを出しているのは佐藤美香だった。
「お前を落とし入れてやるぅ…ネットの怖さを体験させてあげるんだから…」
「これはこれはなんとも…怖いことをしようとするんですね？」
「佐藤、止めとけ」
「はい、草間様ぁ。止めておきます」
俺の言葉を聞いた瞬間邪悪なオーラは何処へやら。コロリと態度を変えてにこにこでれでれ笑っていた。
「佐藤。何度も言うが俺は草間じゃない。柊だ」
「草間様は草間様です」
「この話はまた今度ということで」
今度はいらねぇ…ほんと俺の嫌いなタイプだよあいつは…

第１３話　：　新たな執事登場！（後書き）

今回綾羽と静江とつぐみの出番なかったｗ
変わりに美香が久しぶりに出ちゃったｗ
あはは…
やだなぁ学校…
死ぬぅ…

第１４話　：　なんでそうなる

そして次の日の朝の下駄箱前。
あ～朝から嫌なもん見た…
「おはようございます」
「失せろ」
「それはあなたなりの僕へのあいさつですか？」
「そうだ」
「そうですか」
…朝からにこにこ笑いやがって…
「やはりあなたに綾羽さんの執事は向いていないんです。辞めていただけないですか？」
こいつ…また同じこと言うか？
「だから俺はやってるつもりはない」
「でもあなたは綾羽さんの執事なんですよね？」
「そうみたいだがな」
「そうみたいって…よくわからない人ですね」
くすくすっと如月は笑った。
なんとなくハニカんでる感がする…キモ…
「わからなくて結構だ」
「そうですか」
いちいち笑わんでもいいっ…
「それだけか？それだけだったら去ってくれるとかなり嬉しいんだが」
「去りませんよ。話がつくまでは」
「…うざいなお前」
「うざいですか。それはそれは」
「はぁ…いいから笑うなキモい」
「酷いですね」

「あ～もう。去れ去れ。この話は終わりだ終わり」
「2回言いましたね2回」
「お前も言ったじゃねぇか」
って…なんか前にも誰かにこんなことを言った感じが…
「そうですね」
「お前さ…はっきり言ってむかつく」
「何処がですか？」
「俺と同じでメガネ掛けてるくせして、まずモテるとこ、うざい、散れ」
「それは嫉妬ですか？」
「なんでそうなる」
「あんたたちここで何話してんのよ？」
お～っと綾羽登場。
またまた嫌なもん見た…
つかここで話してるのもそもそも綾羽が絡んでるし…
「ていうより、いつから居た？」
「あんたの『俺と同じメガネ掛けてるくせして、まずモテるとこ、うざい、散れ』のところから」
うわ～…よりにもよってそこから聞いてるこいつ。
「ちょっと大事な話があって話しておりました」
「誤解を招くようなことを言うな、おい」
「う…ちょっと…こんなとこで話してないでよ…気持ち悪い…どっちがゲイ？」
「おい。アホかお前は。どっちもゲイもクソもない」
「それは柊く」
「死ね、散れ。お前殺されたいのか？あ？キモいんだよ」
「すみません。怖いです。ちょっと調子乗っちゃいました」
つかこいつ今『くん』って言おうとしたのか？？確か昨日は…『さん』だったような…
ってもういいや。

「どうでもいいけど、もうチャイム鳴るわよ？」
「それもそうですね。あと2分です」
「な…お前と話してて時間くった……今日は早かったのに…」
「それだけ僕と話しているのが楽しかったんじゃないですか？」
「バカ言うな。お前と話してて楽しいことあるかよ？」
「そうですか。それはちょっと残念ですね」
「キモい」
「あ、ほら鳴りますよ。綾羽さんは先に行ってます」
「お前わざとか？あ？」
「わざと違います」
…やっぱ走るの速いなこいつ…

◇　◇　◇

キーンコーンカーンコーン…
「ぜぇ…ぜぇ…ぜぇ…死ぬかと思った…」
つか生徒会長の俺が遅刻したらどうなるか…
「では、ホームルームを始める」

「…柊くん…まぁ…居ても楽しいですかね…」

第１４話　：　なんでそうなる（後書き）

まぁ、早くも如月に認められた（？）キョウですが～
次は多分つぐみとの映画ｗ
ってことで次も見てください！！
お願いしま～す＾＾＊

第１５話　：　だからって…

「…はぁ…なんで今綾羽にポッキー買いに行かなきゃならねぇんだ…」

『ポッキー買って来い！！！』
『は！？』
『いいから行け！！』

で、なんでこいつが一緒なのかがわからん。
つかこっち向いて笑うな。
「まったく困ったものですね」
「…お前だけ買ってくれれば良いじゃねぇか」
「でも綾羽さんの言いつけですし」
「きしょい。５ｍ離れろ」
「そんなに廊下の幅ないですよ」
「横が無理なら、後ろか前行け」
「そうですか」
そう言って如月は後ろに行った。
そして売店でポッキーを買って、さっさと教室に戻った。
「おら」
「遅い。どんだけ待たせるのよ」
「どんだけって５分だけだろ」
「売店ぐらい３０秒で行って戻ってきなさいよ！」
「は？アホかお前」
３０秒とか…無理だろ普通。急いでも２分。
「あ～もう…のどか沸いた。なんか買ってきて」
「人使い荒すぎだぞお前」
「ってことで早く行って行ってこい！クソ眼鏡！！！！」

…ぜってぇやだ…
でも結局行くことになった。
「お前はついてくるな。うざい」
「そうですか」

◇　◇　◇

俺は急がず自動販売機に行ってリンゴジュースを買った。
「はぁ…くそ…ぜってぇ綾羽の奴楽しんでるぞ…あれ…」
先から俺を見てる視線があるんだがなんだ？誰だ？
「…俺に何か用か？」
俺は後ろを見ず、その後ろの人物に問いかけた。
「へぇ…気づいてたんだ？優秀だね…あんたが今年の綾羽の執事。確かにクソ眼鏡だよ。隣のクラスまで聞こえてた」
「で、お前はなんだ？」
俺はそう言いながらそいつを見た。
「あんまり名乗りたくないけど、俺は去年の綾羽の下僕。片岡俊、よろしく」
…噂通りこいつ普通だな…おい…
顔も背も普通だ。多分これじゃ頭も普通。
こんな平均なやついるか？
あ～…居たか…つぐみが…
結構つぐみとこいつ似合ってんじゃね？

◇　◇　◇

「くしゅんっくしゅんっ。あれ…誰だろ…私のこと思ってるの…」

◇　◇　◇

「お前か、去年の下僕」
「俺は去年綾羽と同じクラスで、ボーっとクラスの奴の微妙さを思っていたら、声掛けられたんだよ奴に」
「あっそ。そりゃあ、お気の毒にな」
「あんたもだよ。あんたのクラスに聞いたが、教室のドア開けて目が合って、下僕になったんだろ？」
「あれは失敗だった」
「アホだな」
　こいつむかつく…
「そう言えばあんた生徒会長だっけ？誰もやりたがらなくて、頭良いあんたにすぐ決まった生徒会長」
「そうだがなんだ？何しに声掛けてんだよ。おかげで綾羽にたっぷりと怒られる」
「そりゃあ、お気の毒にな」
　それさっきの俺の言葉じゃねぇか…むかつく…殺す…こいつ殺してぇ…
「じゃあな、また会おう」
「……」

なんだったんだあいつ…
そして帰って、綾羽は１０分待たせられて不機嫌だった。
「お～そ～い！！！」
「仕方がねぇじゃねぇかよ。ちょっと話してたんだからよ」
「誰とよ？」
「お前が良く知ってる奴だよ」
「良く知ってるって…誰？」
「片岡俊」
「シュー？なんで？」
「シュー…？なんだそのシュークリームみたいで、おいしそうなあだ名」
「俊でシューよ」
「…そのままだし。つかお前自分の下僕に必ずあだ名付けるのか？」
「いいじゃない。呼びやすいし」
だからってシューはねぇな…俺のキョウもまずない。
「何話してたのよ？」
「何でもいいだろ」
「話せ！！」
「うるせぇな」

第15話　：　だからって…（後書き）

うわ～…なんかなげぇ～
無駄になげぇ
片岡何したかったんでしょうね？
まぁ、この後出るようになりますけど…
片岡ね～…そのうち片岡と綾羽の話も出しますw
ってことで次の話も見てくださいwお願いしま～すw

第１６話　：　今日は――

「あ～…やだな今日…」
「今日と言う日の何が嫌なのよ？」
…何でいちいち綾羽(こいつ)に言わなきゃならねぇんだ…
「…嫌だから嫌なんだ」
「む…」

「恭介～」
…？あぁ…なんか最近出なかったから一瞬誰かと思った…
「なんだつぐみ」
「あのね。私すっかり忘れてたんだ。ごめんね」
「いきなり何の話をしてるんだ」
「今日は恭介のた」
「それ以上言うな」
あっぶねぇ…綾羽に聞かれたらなんて言われるか…
「え～…なんで？」
「なんでじゃねぇ」
「とにかく今日放課後どこかに寄らない？」
「めんどい」
「良いでしょ？恭介」
「やだ」
「ちょっとつぐみ！教えなさい！今日はキョウの何の日なわけ！？」
なんで割り入って来るんだこいつ…
「あ…初めて綾羽さんに名前を呼ばれたのに呼び捨てだぁ…」
「そんなことはどうでもいいから教えなさい！！！」
「つぐみ教えるなよ？」
「教えなさい！！」
「恭介、そんなに恥ずかしがることは、無いんじゃないのかな？」

「いいから言うな」
「えっとね今日、５月１８日は恭介の誕生日なの」
終わった…最悪だ…
「おい、なんで言うんだよ？」
「へぇ…今日がキョウの誕生日…」
嫌な予感…悪寒がする
「キョ」
「やだね」
「何よ！まだ何も言ってないじゃない！！とにかく放課後残りなさい！」
「は？」
「残ってないと――」
綾羽は俺に指を指して…
「死刑確定だからね？」
にやりと嫌な笑みをした。
…死刑…誰かさんにかぶる台詞を言わないでほしい…ほんとに俺キョ〇みたいじゃねぇか。
「…はぁ…」

◇　◇　◇

そして放課後…
「ほら行くわよ！！」
綾羽は俺のネクタイを勢い良く引っ張ると、ある人物たちに話しかけて自転車小屋まで来た。
「…はぁ…死ぬかと思った…」

「それはそれは…合掌ですね」
如月はにこにこ笑いながら俺に向かって合掌をしてきた。
「笑いながら合掌されたくねぇ。つかお前にされたくねぇし。しかもなんで俺が合掌されなきゃならねぇんだ」
「そうですよね。僕もされたくありません」
「じゃあするなキザ」
「僕そんなにキザですかね？」
「キザだ。キモキザだ」
「悲しいですね。僕があなたにそんな風に思われているのは」
うあああっ…キモいっ…ぞわぞわくるっ…
「そこだ。まずそこがキモい」
「そうですか。それはそうと、柊くんお誕生日おめでとうございます」
「お前に祝いをされたくねぇ」

「ね…ねぇ…綾羽さん…」
「何よつぐみ」
「…恭介とあの人っていつもあんな感じなの…？」
「…そうよ…おぞましいったらないわ…
どっちがゲイなのかしら…そこが気になるところよね」
「きょ、恭介はゲイなんかじゃないですっ！」
「つぐみ。何話してんだよ？」
ゲイ…？俺はゲイもホモもクソもなったことは無い。
「え！？えっと…なんだろうね…ね…」
「あ～もう！キョウ！如月くん！ついでにシュー！早く女子を自転車の後ろに乗せて近くの喫茶店に行って！」
なんで女子を自転車に乗せねぇといけねぇんだろうか…
「僕は未だにニックネームなしですか」

如月は残念そうに言いながらもにこにことしている。
…正直言ってあだ名で呼ばれてない如月が羨ましい…
「なんで俺まで…去年で綾羽とは縁が切れたはずなのに…」
つか片岡居たのか…
「何か言った？シュー？あんたとはクラス違くなったけど、私の執事には変わりないんだからね？」
「…はぁ…って言うかなんで『ついでに』俺？『ついで』って付けるなら俺必要ないよね？」
「必要なの。あまり一人の自転車に何人も乗せると危ないでしょ。女子は合計で４人なんだから。
まぁ男子は３人だから誰か一人が二人乗せないといけないけどね」
「あのなぁ…綾羽。なんで女子は自転車乗らないんだ？」
「口答えしないの！下僕の癖に！！キョウと如月くんとシューは、さっさと自転車出して来い！！！」
綾羽の奴…真面目に俺の誕生日祝ってくれんのか…？
つか…なんか綾羽に祝ってもらいたくない…

第１６話　：　今日は――（後書き）

あ～…キャラクターが多いよぉ…
あ～でもまだまだ増えるんだよなぁ…
…はぁ…頑張りますか…

第17話　：　佐藤の得意なこと

「如月くんは美香を乗せて」
「ちょっとぉ。なんで私がこんな奴に乗せてもらわないといけないのよ！！」
…あぁ…佐藤居たのか…まぁ…なんかすごい視線を感じると思っていたが…
「私は草間様に乗せてもらいたいの！！」
「僕はこんな奴呼ばわりですか」
うわ～…無駄ににこにこしてるし…
片岡はそんな如月を「ざまー」と言って笑っていた。
「草間なんていう奴なんか居ないじゃない」
「居るじゃないここにっ！！！」
佐藤は俺に思いっきり抱きついてきた。
「ぐぇ…」
「「っ！？」」
綾羽とつぐみがものすごいオーバーな反応をした。
「ちょっと恭介に抱きつかないでください！！恭介が嫌がっています！！！」
…大声で俺の名前言わないでほしい…なんか…周りがすごい注目してる…
「離れなさい！！そいつは私の下僕よ！！！」
そいつ…
「草間様は下僕なんかじゃない！！」
「だから俺は草間じゃねぇって。つか離れろ」
「…離れてあげてください…佐藤さん」
…真白いたのか…吃驚した…
「しょうがないわね…わかったわ。そこまで言うなら…ハッキングしてあげる。クスッ…」

佐藤はすごい黒い笑みをした。
ハッキング！？
「何のハッキングだよ？」
「久々津グループの…事務かな…よくわかんないけど…データーが保存されているところをハッキングするの。クスッ」
「ちょ、何よそれ！？」
「倒産させてあげるわ。クスクスクスクスッ…一気に貧乏になりなさい」
佐藤はスクールバックからノートパソコンを出すと打ち始めた。
すごい早さだ。
キーボードがカタカタ聞こえるレベルを越して、ガタガタ聞こえる。
壊れるんじゃないか？
「ちょっと！！止めなさいよ！！！」
綾羽は佐藤からパソコンを奪おうとする。
「止めないわ」
佐藤は避けながら打っている。
「さて、これであとはＥｎｔｅｒキーを押せば倒産よ。クス…」
綾羽の顔がどんどん青ざめていく。
「止めておけ佐藤。お前は素直に如月の後ろにでも乗っておけ」
「はい。草間さまｗ」
佐藤はころりと小悪魔の笑みを満面の笑みに変えた。
「な！？何その変わりようはっ…」
「止めておきますね、草間様ぁ」
佐藤はさっさとパソコンをカバンに入れた。
「…まぁいいわ。で、つぐみ。あんたはどっちに乗りたい？」
「え…？私ですか！？…それは…」
「…よね…じゃあ私とつぐみはキョウの後ろね」
「俺が二人乗せるのかよ…」
理不尽だ…

「そりゃあキョウは私の執事だし」
「はぁ…」
「有希ちゃんはシューの後ろね。はいＧｏ！！」

第17話　：　佐藤の得意なこと（後書き）

しばらくの間手を休ませてもらっていましたっ！！
あはははw
ふぅ…誰か読んでくれるかな…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7548f/

スクールバトラー

2010年10月18日22時06分発行